

2005 年春休み友情のレポーター ベトナム取材レポート

中道 洋司（東京都 / 当時 14 歳）

1 日目 3 月 26 日

国境なき子どもたち（KnK）主催の 2005 年春休みの友情のレポーターとして、ぼくと鈴木まり子さんはベトナムへ行くことになりました。彼女は、三重県の高校一年生で、ぼくより 2 つ年上です。また、ぼくたちをサポートするため、KnK スタッフ 3 人（KnK の事務局長で語学が堪能な金珠理さん。理事でプロカメラマンの常田高志さん。KnK 設立者でフランス人のドミニク・レギュイエさん）が同行してくれました。

成田を出発したベトナム航空 951 便は、定刻通り 14 時 25 分にホーチミンに到着しました。空港には、KnK の現地スタッフの大竹綾子さん。ベトナム人スタッフのロップさん。そしてグループホームで生活しているフーン君とロップ君が出迎えてくれました。ベトナムでの取材には、大竹さんと、ロップさんの二人が加わり、合計 7 人で行われました。

ホテルに荷物を置いた後、国際協力機構（JICA）を訪れて、スタッフの山崎優子さんに話を聞きました。「ストリートチルドレンにお金をあげることは悪いことではありません。一時的には飢えをしのげるでしょう。それよりも、私たち日本人がすべきことは、まず彼らの実態を知ることです。その上で、彼らに対して継続的な支援をすることが大事なのです。」

2 日目 3 月 27 日（写真、）

午前中にグループホームを訪れました。ここでは、17 歳から 23 才までの 6 人の男子が共同で生活しています。昨日空港で出迎えてくれたフーン君とロップ君もいました。彼らは、ここから職業訓練を受けに行ったり、学校へ通っています。彼らはかつてストリートチルドレンで、公園や路上で寝泊りし、宝くじや新聞を売っていました。中には盗みをしていた人もいました。

昼食後、動植物園に行き、そこで上演されているサーカスを見学しました。出演者全員が KnK からの支援を受けています。そして、彼らの暮らす「シェルター」と呼ばれる孤児院を訪れました。この施設は、仏教系の寺院が運営していて、寺院の隣に併設されています。生後 6 ヶ月から 15 才ぐらいの男女 120 人ほどが生活しています。サーカスクラブには男女 30 人位がいて、この施設の屋上でジャグリング、一輪車、フラフープなどを練習しています。

3 日目 3 月 28 日 (写真)

午前中に 2 つの博物館を見学しました。ひとつは戦争証跡博物館。ここには、ベトナム戦争に関する様々な資料が展示されている博物館です。実際に使用された武器や、多くの写真やパネルがあります。枯葉剤の影響を受けた奇形児のホルマリン漬けも展示され、戦争の残酷さを訴えています。もうひとつは歴史博物館。ベトナムの歴史・文化を紹介している博物館です。

午後に児童教育訓練センター (CETC) と若者の家・女子を訪れました。

CETC では、6 才から 15 才の男女 300 人ほどが生活しています。彼らは全員元ストリートチルドレンで、警察に保護されて (捕まって) ここに来ました。施設の中には学校や職業訓練所もありますが、外出することはできません。まるで刑務所のようで、決して良い環境とは言えません。それでも、数年前に比べればかなり改善されたそうです。

若者の家・女子には、約 10 人の 15 才から 18 才の女子が生活しています。彼女たちはかつて、CETC に収容されていました。彼女たちは、家庭に戻ることに厳しく、勉強や職業訓練を受けたいという子どもが暮らしています。ぼくは日本から折り紙を持参し鶴の折り方を教えるつもりでした。しかし、彼女たちはすでに知っていて、逆にぼくが知らない折り方を教えてくれました。

4 日目 3 月 29 日 (写真)

今日は空港で出迎えてくれたグループホームのフーン君が学校に行くまでの間ぼくたちの取材に加わりました。

昼食はフランスの NGO が経営するレストランでトマトスープ、ハンバーガー、フルーツを食べました。このレストランも、ストリートチルドレンを支援する職業訓練所の一つです。建物の上の階には学校があり、歴史や数学、英語の他テーブルマナーの勉強をしています。

昼食後、近くの公園でフーン君と話をしました。彼も以前ストリートチルドレンで、この公園で寝泊りし、宝くじを売ったり、盗みをしていました。この近くにいるフーン君の友人とも話をしました。彼らは兄妹で、兄はバイクタクシーの運転手、2 人の妹のうち 1 人は昼は学校へ行き、夜はタバコを売っています。

フーン君と別れた後、夜 7 時頃、公園で宝くじを売っている 2 人の少年と話をしました。彼らもストリートチルドレンです。オーナーという人のもとで 10 人ぐらいで生活し、寝床と食事は与えられています。売り上げの一部は自分たちが受け取り、そのほとんどを両親に渡しています。

5日目 3月30日 (写真、)

ホーチミン市の西に位置するチョロンは、市場が多くあり、活気のある地域です。市場では、食品、日用品など様々な物が売られています。ここでは、路上で生活する親子(ストリートファミリー) また公園では、薬物中毒らしい少年を見かけました。しかし彼らと話すことはできませんでした。市場から離れた路上で、赤ん坊を背負った少年に話を聞くことができました。その少年は3日前にカンボジアから来たばかりで、背負った赤ん坊は彼の弟ではありません。おむつもはかされていない赤ん坊は物乞い道具にしかすぎないのです。

その後、CTECを再び訪れました。かつてストリートチルドレンだった10才前後の子どもたちに話を聞きました。彼らは家が貧しかったため、家計の負担を軽くするために、自ら家を出ました。誰かから強制された訳ではなく、自らの意志でストリートチルドレンになったのです。彼らは親の愛情を十分に受けているとは言えませんが、決して親を恨んではいません。

その夜、オープンテラスのレストランで夕食をとっていると、2人の物乞いの少年が近づいてきました。彼らは兄弟ではありません。お互いの家族と共にカンボジアから来て、市内を流れる運河の川岸で生活しています。彼らとは、2日後にまた会うこととなります。

6日目 3月31日 (写真、)

KnKが支援する若者の家・男子では、現在15人が暮らしています。彼らはここから職業訓練所や学校に通っています。その様子取材のためにオートバイ修理店と理髪店に行きました。理髪店のオーナーもかつてストリートチルドレンでCTECに収容されていました。その当時のCTECは立ったまま食事をするようなひどい待遇でした。

7日目 4月1日

再び、お土産に洋ナシ、みかん、リンゴなどを持参してシェルターを訪れました。子どもたちひとりひとりに果物を渡しました。それを受け取ると、とても人なつこい笑顔でお礼を言って、手を合わせる子もいました。

暗くなってから、サイゴン川へ注ぐ運河に行きました。一昨日、レストランで会ったカンボジア人取材するためです。2人の少年は、一昨日と同じ服を着ていました。その他、彼らの両親らしい人を含めて大人が5人、子どもが約10人いました。カンボジアはベトナムよりさらに貧しい国で、現金収入を得るため多くの人たちがホーチミン市に流入しています。ホーチミン市で物乞いをしている全てがカンボジア人です。

物乞いをしているベトナム人はいないそうです。

8日目 4月2日 (写真)

ホーチミンの南東約125キロメートルにあるヴンタウというビーチリゾートへ、CETCの子どもたち40人と海水浴に行きました。普段、外へ出られない子どもたちは、バスの中で大さわぎで、とてもはしゃいでいました。ヴンタウに着いても彼らは自分たちだけが楽しむことに一生懸命で、ぼくたちと話をしたり、遊んだりすることはありません。まるで、ぼくたちを無視しているようで、ぼくはあまり愉快ではありませんでした。しかし、CETCでの彼らの不自由な生活を思えば、彼らの行動も少しは理解できます。彼らにとって楽しい一日であったのなら、それで良かったのかもしれない。

9日目 4月3日

ベトナムでの最後の日には、市内の市場へ行き、買い物をしました。ベトナムでは、値切ることは当たり前で、値札が付いていてもその値段で買う人はいません。ぼくは、日本の家族や友人へのお土産として、おはしやお茶を買いました。しかし、最も大きなお土産は、今回の経験だと思います。ベトナムの恵まれない子どもたちの実情を多くの人たちに知らせることができれば、レポーターとしての役割は果たせると考えます。

最後に、このような機会を与えて下さったKnKの皆さんに心から感謝いたします。ありがとうございました。

2005年 春休み友情のレポーター 中道 洋司

2005 年春休み友情のレポーター ベトナム取材レポート

鈴木 まり子（三重県 / 当時 16 歳）

日本に帰ってきて2日目。家でテレビを見ていても、電車に乗ってみても、友達とランチしていても違和感がある。ひさしぶりに会った友達が「まりこ」って抱きしめてくれた時もベトナムで会った人たちのことを思い出した。友達の笑顔がベトナムで会った子たちの笑顔にだぶったりする。

9日間で、人生の価値観がひっくり返った。今まで、必死になってしがみついていた世界の小ささも知った。

客観的で、正確なレポートは書けそうにない。だから、私は私を感じたベトナムの空気と子どもたちの姿を書きたいと思う。

楽しかった。言葉の壁なんて関係ない。笑顔に国境なんて関係ないんだ。

と同時に、こちらの思いが伝わっていないんだなと感じる場面もあった。どうして、こんなにも思っているのに伝わらないのだろうか？と。両方の面を見ることができて、よかったと思っている。楽しいだけで終わらなくてよかったと思っている。

たとえどんなにつらいことでも、私は知らないでいることより知ることを選ぶ。思いがまだ届いていなくても、それでもやっぱり私は、何かをしたいと思う。

- 3月26日 ベトナム到着
フーンとロップ
ファムラオのカフェでストリートチルドレンの男の子
JICAで優子さんにインタビュー
優子さん、葉子さん、綾子さん、プラス日本から来た5人で
- 3月27日 グループホーム
昼食（グループホームの子と）
サーカス見学
孤児院
- 3月28日 ベトナム戦争資料館
ホーチミンシティミュージアム
CETC
若者の家・女子
- 3月29日 恵まれない子どものための料理の学校で昼食
ストリートチルドレンに会いに行く
トゥン（卒業した）の家へ 家族と夕食
- 3月30日 フーンの案内 ストリートチルドレンに会いに行く チョロン
CETCでインタビュー
- 3月31日 若者の家・男子
職業訓練先訪問 バイク修理2
ヘアカット1
- 4月1日 前回と同じレストラン
ロップにインタビュー
孤児院にフルーツを届ける
カンボジア人の家族に会いに行く
- 4月2日 ビーチ
- 4月3日 ショッピング
グループホームの子たちと夕食

< ベトナム到着 >

空港から1歩踏み出した瞬間。太陽の光がまぶしすぎて、思わず目をつぶる。もあっとまとわりついてくる空気。暑い。汗がふきだしてくる。これから起こることへの希望にあふれて、ホーチミンの空港に降り立った。

空港には、迎えが来てくれていた。綾子さんとフーンとロップ。フーンとロップはグループホームにいる。以前は路上で生活していたという。あたたかい出迎えと笑顔に、緊張がほぐれた。

日本とベトナムでは、あらゆるところで違う。ホーチミンは私が想像していたよりも、ずっと都会だった。目にうつるもの、すべてが新鮮だ。ベトナムのもつ雰囲気圧倒されて、口数も少なくなる。

フーンが英語でたくさん話しかけてくれるのに、私は上手に答えられない。あせってしまって、相手の言葉が聞き取れない。英会話を勉強してこなかったことをとても後悔した。余裕をなくして、笑顔を忘れていた。失敗することを恐れてしまった。私の中で、声にできなかった言葉がぐるぐると回る。ききたいよ。伝えたいよ。私に英語が通じなくて、困ったように「Too hot!」とあおいで見せたときの顔やまっすぐにこっちを見つめる目を思い出す。

< Hello ! >

ホテルの前の通りをみんなで歩いていた。聞き慣れないベトナム語が洪水のように、おしよせてくる。大きなクラクションを鳴らすタクシーもおかしな日本語でしゃべりかけてくる店員も、すべてが恐怖だった。さっきまでの自信や元気はすっかりしぼんでしまった。道路の様子だって、日本と全く違う。まず、行きかうバイクの数に圧倒される。通りを横切ろうにも、バイクは止まってくれない。右左を確認しながら、おそろおそろ渡る。ひとりでは、怖くて渡れずにドミンクさんにくっついて渡った。どうして、ロップやフーン(ベトナム人が)がすたこらと間をぬって渡れるのか不思議。

カフェに向かっているとき、1人の男の子が笑いかけてきた。片手をあげて、「Hello!」。くりくりの頭。決して、きれいとは呼べないTシャツ。[How are you?]と手を差し出す。とまどいながらも握手をする。そして、しばらく後をついてきて、私の手を握ってきた。どうしていいかわからなかった。その汗で湿った手はかたく握られ、何かを伝えようとしているかのようだった。ふりはらうことなんてできなかった。

その子は、店を指さし、入ろうと誘う。その場にいた全員に握手を求めた。気をきかせて、洋司君のかばんをしめてあげたりと世話をやいていた。意味なんて分かっていないだろうに、日本語と英語の会話に相づちを打つように笑った。

フーンが尋ねても、年齢は教えてくれなかった。言いたくないと首を横にふった。

10年間、彼は路上にいるのだという。年齢のわりには、小さい体。私はあまりに緊張していて、それ以上何かをきくこともできなかった。これが最初のストリートチルドレンとの出会いだった。

私には、結局彼がなにを求めてやってきたのかわからなかった。何かを盗る様子もなかった。一緒にいたかった？友達になりたかった？かまってほしかった？愛情を注いで欲しかった？

車に乗り込むときにそっとおしてくれた彼の手。少しこびるような目。窓ガラスの外から手をふる笑顔。手をあわせておがむしぐさ。忘れられない。

その後も、何回か彼に会った。「hello!」というあいさつからはじまり、同じ流れをふむ。何かを欲しがらなくても、ただ、そばにいただけ。他の観光客の手をひいて歩いている姿も何度か見かけた。

ねえ、君は何を求めているの？

< JICA・優子さん >

レポーターとしての初仕事！！

JICAで働く優子さんにインタビューした。JICAのオフィスは、頑丈な扉のむこうにあった。優子さんは、前はフィリピンやベトナムでKnKの仕事をしていた。とても穏やかな話し方をする人だ。青年海外協力隊のこともいろいろ教えてもらった。

仕事をしていて、楽しいと感じたのは、子どもたちの笑顔を見た時。つらいと感じたのは、ささいなけんかなどで子どもが施設を飛び出してしまった時だという。日本の子どもたちにできることは、まず、現状を知ること。もっと勉強することだと話してくれた。

私は、ベトナムに来る前から思い続けてきた質問をぶつけてみた。どうしたら、ストリートチルドレンや難しい状況にある子どもたちを救えるの？ 優子さんの答えは、「それは、とても難しい」ということだった。国ごとに支援の形が違い、事情も複雑なのだという。

私は、少しがっかりした。ベトナムに来たら、答えが分かると思いこんでいたから。ここで会う人たちは答えを教えてくれると思いこんでいたから。世界を変える方法を。子どもたちを本当に救う方法を。進むべきははっきりとした道を。知っているものだと思っていたから。

優子さんが何を背負っているのかは、わからない。でも、優子さんの寂しいような寂しいような目が気になった。

< オトナ >

私は、今まで力で押さえ込もうとする大人や先生に反発しながら、生きてきた。先生は神様で、大人は完璧な生き物だと信じていられるほど、子どもではなかった。かといって、受け容れられるほど大人でもない。

でも、この大人たちは、私が今まで出会ったことのなかった種類の人間だった。そんな人たちに出会えて、話ができただけでも、この旅は大きな意味があった。

< グループホーム >

人がひとり、やっと通れる階段をのぼった。2階で迎えてくれたのは、10人くらいの大きなお兄さんたち。水色の壁のこの広いとは呼べない部屋が彼らの家。KnKが運営するグループホームにやってきた。17歳から23歳くらいの男の子が生活をしている。みんな路上で生活をしていた経験がある。今は、職業訓練やより高度な教育を受けるために援助をうけている。

輪になって座って、質問をした。日本語から英語、英語からベトナム語へと2人の

通訳をはさむ。このときは、言葉の壁を感じた。

どうしていいかわからなかった。指示されることに慣れきっていた私は、助けを求めて何度も珠理さんを見た。とまどいと緊張でいっぱいだった。いろいろな質問を試みるけれど、抽象的なことや一般的なことしか返ってこない。昔のことを話したがらない。どこまで聞いていいんだろうかと迷った。ベトナムの場合、ストリートチルドレンが存在する原因には、貧困の問題、政府の方針、家庭の問題があると話してくれた。家庭を飛び出し、路上で暮らすことになったことを後悔していないと言い切る子が何人もいた。友だちの手前、ちょっと強がっている部分もあるんじゃないかな。

「ストリートには赤信号、黄信号、青信号がある。自分がしっかりしていないと、麻薬やギャンブル、いろいろなわなに落ちてしまう。危ないめやつらいめにもあってきた。でも、友だちもいっぱいできた。」

<グループホーム boys>

カメラが止まった瞬間。みんなに笑顔がもどる。わぁっと立ち上がる。いきいきとした表情。昼食をいっしょに食べにゆく。みんな、はしゃいでいる。ふざけあたりして楽しそう。日本の子と変わらないと思った。重い過去を少しも感じさせない。それがちょっと意外だった。自分の中に、先入観があったことがわかった。

<サーカス>

サーカスを見学する。会場は動物園の野外ステージ。練習風景や準備の様子も見せてもらった。出演するのは、6人の女の子たちだ。16才くらいの子が2人と13才の子がひとり。あとの3人はまだ小さい。みんな、元ストリートチルドレンだときいた。でも、そうきいていなかったら、まったくわからなかったと思う。それは、はしゃいだり、笑ったり、ふつうの女の子とどこもかわらないから。

21才だという が案内してくれた。 は明るく、よく笑った。 もサーカスにでていたという。他のみんなは、ひらひらの衣装に着替えて、化粧をしているところだった。小さな子も鏡を見ながら、自分でしていた。笑い声にあふれていて、部活の更衣室を思い出す。

大きな子たちは、みなKnKの人たちと昔からの知り合いだった。とても、仲がいい。本当に会えて喜んでいることが、伝わってきた。

舞台裏も見せてもらう。彼女たちには、無理矢理やらされているって感じはしなかった。辛そうと言うよりは、むしろ楽しんでいる感じだった。

派手な音楽が流れ、ショーがはじまる。いつの間にか、お客さんもけっこう集まっている。私たちが観客側に移動して、ショーをみる。危険な技もやっている。失敗す

ることもあるという。心配で楽しむどころじゃなかった。KnKの人たちも同じみただった。

< 孤児院 >

現地のお寺が運営する孤児院を訪問した。5ヶ月から20才の子どもたち、125人が暮らしている。門の前に、赤ちゃんを置いていく人が絶えないという。ベトナムの政府は16才で、保護をやめるが、この施設では早すぎるとしている。昼間に会ったサーカスの子たちもここで暮らしていたり、サーカスの練習に来る。

壁に囲まれている。学校の校舎のような建物だ。運動場の真ん中の太い木が木陰を作っている。2段ベッドがたくさん見えた。

整列して、お祈りをしてから食事をとる。壁の内側は、ゆっくりとした空気が流れている。子どもたちの世話をしているのは、尼さん、親くらいの年代の女の人、年の大きい子たちだった。

たくさんの目がこちらを見ている。遊んでいる小さい子に近づいていっても、逃げていってしまう。視線があわないし、笑ってくれない。やっぱり、突然やってきて仲良くはなれないのかな。

ベトナム語がわからない。どうしていいのかわからない。だれも、こうしなさいと教えたり、助けてくれないし、助けてほしくない。

昼食後、外に整列した子どもたちに、自己紹介をした。みんな、「へんな人が来た」って感じで見ている。先生にうながされて、歓迎の歌を歌ってくれた。後ろのほうにすわっている大きな男の子たちは、歌わない。歌えって言われても、恥ずかしいし、やりたくないから歌わない。その様子が日本の友だちとだぶって、逆にほっとした。

逆に質問がある人ときいても、みんな黙っている。歌のお礼に何かしたら？と、ロップさんや綾子さんが言う。

私は、バルーンアートをした。風船がだんだんとふくらんでいく様子をたくさんの目が見つめる。ねじって、犬を作った。前のほうに座っている小さな子たちの目が大きく見開かれる。「何に見える？」とたずねると、あちこちから「ドッグ」ときこえた。足下まで、小さな子どもたちが手を伸ばしてやってくる。もう列はバラバラ。1人の赤ちゃんに作った風船をあげてしまうと、もっと作ってと膨らましていない風船をもってくる。歓声とともに、ぐちゃぐちゃになる。第2弾、第3弾は作れそうにもない。でも、これをきっかけにうち解けることができた。

無邪気に飛びついてくる。とてもかわいい。仲良くなってしまうと、言葉が通じないのはまったく関係なかった。さっきまで私たちの間にあったのは、言葉の壁ではなく、心の壁だったんだ。

ひとりの女の子と特に仲よくなれた。13才。彼女の夢は医者になることだって話してくれた。英語が上手だった。折り紙で「きもの」を折ってくれた。ほかにも、折り紙の折り方や、フラフープのやり方を教えてくれた。折り紙は、昔、日本のボランティアの人に教えてもらったのだという。ベトナムに来て、折り紙の折り方を教えてもらえるなんて思わなかった。彼女は、ずっとそばにいて、そっと私の手をにぎり、微笑みかけてくれた。

ひとりの子がアドレスを教えてほしいと言ったので、名刺をあげたところ、あっという間になくなってしまった。でも、そのおかげでみんなが名前を覚えてくれた。いろんな子どもたちが「まりこ」って言いながら抱きついてくる。私もぎゅって抱きしめ返す。手をつないでくる。私も握りかえして、笑いあう。ひざに乗ってくる。ずっと笑顔だった。本当に楽しかった。

帰る時になっても、両手を子どもたちがひいてくれた。「まりこ、まりこ」って合唱するように唱える。タクシーに乗ってからも、「まりこー」って窓ごしに叫んで、はしゃいでいる。

はじめて、こんなにも人を愛おしいと思った。抱きしめてあげたいと思った。彼らの笑顔が見たい。彼らのことを心から思っている友だちがいると伝えたい。

愛情を注いでほしいという気持ちが伝わってきた。私は、何かしたいと思って来ていたのに、逆に私のほうが、みんなからたくさんのもらってしまった。あったかい気持ちでいっぱいになった。

どうか、この子たちの未来が明るいものでありますように。

どうか、この子たちが5年後も10年後も、同じ笑顔をお忘れませんように。

どうか、この子たちに哀しい目をさせないでください。

愛をください。友情をください。笑顔をください。安心をください。信頼をください。明るい未来をください。

自分の無力さを感じるから、何かに祈らずにはいられない。

5日後に、再訪問した。短い時間だったけれど、ひとりひとりにフルーツを手渡すことができた。私のことを覚えていてくれたみたい。「まりこ」と飛びついてきた。うれしかった。折り紙を教えてくれたあの子は、今日は制服を着ていた。自分の分の梨を私にわけてくれようとした。その優しい気持ちだけで、十分だよ。あなたのおかげで私の胸はいっぱいだよ。

< T r u c >

すらりとして、長い黒髪がとってもきれいなチュップ。私と同じ年の16才。昼間、サーカスに出演していた子だ。サーカスで会った時も孤児院で会った時も、彼女は綾

子さんや珠理さんのところに寄っていった。昔からの知っていることもあり、仲がいい。大人の女性に甘えたがっているようにも見えた。彼女は、今まで甘えられない状況にあったのだろうか？何か事情がありそうな感じがした。チュップと向かい合うまでは、インタビューで家族のことをきこうと決めていた。

孤児院の3階のサーカスの練習場でインタビューをすることになった。小さな野次馬たちがもの珍しそうにとりかこむ。あたりが暗くなってきた。強いライトがむけられて、まぶしい。チュップは、緊張しているみたい。さっきまでの笑顔がひいてしまった。鼻の上に汗をびっしょりかいている。チュップと私が並んで、ひとつのベンチに座る。助けを求めるように、何度もドミクさんたちのほうを見る。甘えるように綾子さんのほうへ手を伸ばす。あまり、こちらを見てくれない。初対面だから仕方ないのかもしれないけれど。うながされて、インタビュー開始。

まず、聞いたのはサーカスのこと。サーカスは楽しみとしてやっていて、職業にするためじゃないとのことだった。学校のことや何気ない質問をいくつかする。

「今、どこに住んでいるの？」

「別のシェルターです。」

答えるチュップの声は、小さくて消えそうだった。質問が家族のことに移ると、チュップの表情はさらにかたくなった。落ち着かない様子で、ベンチの足をトーン、トーンと蹴る。家族のことをきいても、答えが少しずつずれてかえってくる。家族の姿が見えてこない。具体的なことを話したがない。チュップは全身で「言いたくない」「きかないで」と訴えていた。とても哀しい目をしていた。カン、カン、カン。ベンチを蹴るのが激しくなる。ベンチをとおして、伝わるチュップの痛みが私の中で、共鳴する。胸がいっぱいになって、言葉がのどにつかえてしまう。頭では、わかっている。私のやるべきこと。聞くべきこと。でも、つらい。涙がでそうだった。本人が話したがないことをどこまできいていいのか迷った。十分すぎるほど、つらいことを経験してきたら彼女に、もうこれ以上かなしい顔をさせたくなくて、バカな質問をいっぱいしてしまう。

できないよ。客観的になることなんてできないよ。もしも、自分だったら、私の友だちだったらって考えてしまう。同じ年の女の子だから、わかること、伝わってくることもある。カメラをむけることができないよ。相手の気持ちが痛いほどわかるから、聞けないよ。たとえ、それが必要なことでもつらいよ。

インタビューはうまくいかなかった。質問することができなかった。ただ、インタビュー中は、目をあわそうとしなかったチュップが、紙の裏に自分の住所を書いて、私の手に握らせてくれた。

< C E T C >

C E T Cを訪問する。政府がつくった施設で、400人くらいの子どもたちが生活している。元ストリートチルドレンの子どもたちだという。建物は高い壁に囲まれている。入り口には、見張りが立っている。ここは1度入ったら、自分の意志ではでられない。

併設されている学校を見学した。9グレードあって、学年は年齢に関係なく決まる。だから、教室には年齢のさまざまな子どもたちが座っていた。案内役の先生が入っていくと、みんな大きな声をだして、あいさつか何かをした。みんな背筋をのばす。誤って、先生が台からすべり落ちたときも、誰一人笑わなかった。先生も何もなかったことのように、読みの授業をすすめる。変な感じがした。どの教室に行っても、先生はみんなしかめっつらをしていたから。威厳のある表情とやらを作っているように見えたから。子どもってそういうのを敏感にかぎわかる。

～ 食事 ～

食事の時間がやってきた。午後4時。整列と点呼がある。せまい部屋から、たくさんの子どもたちがでてくる。列になり、両うでをそれぞれの肩にかけ、食堂へむかう。まるで、囚人のようだ。食堂は子どもたちでぎゅうぎゅうづめた。それに、とても蒸し暑い。ツーンと不快な臭いもする。先生らしき男の人が前に立って、強い口調で話をする。子どもたちの表情はかたい。姿勢をただしている。大きな声で返事をして、食べ出した。メニューは、大盛りのご飯に1種類のおかずだけ。

私はきっと、ここでは何ものどをとおらないだろう。今でも、いい環境とはいえない。これでも、昔よりは改善したのだときいて、驚いた。昔はいすがなかった。子どもたちは、立って食べた。時間も5分くらいしかなく、小さい子は食べられなかった。まるで、刑務所のようなだったという。

～ 生活 ～

2階建ての建物のうち、子どもたちが生活しているのは、1階。とても狭い部屋だ。2段ベッドが4つおけるくらいの部屋。そこに35人くらいの子どもが生活している。衛生状態もよくない。すっぱいにおいがする。とても暗い。窓が入り口側にたったひとつあるだけなのだ。そして、そのたったひとつの窓には鉄格子がつけられている。

ここは、まるで刑務所だ。子どものことを思って作られた施設じゃない。子どもは囚人じゃないよ。軍隊じゃないよ。

私はここではぜったいに生活できない。「右向け右」と言われたら、私は左をむきたくなる。ここでは、子どもを大人が管理している。規則があれば、考えなくていい。

はじめから管理されているのでは、自分の頭で考えることをやめてしまう。罰によって従わされているのでは、罰のないところへ行った時、思慮のない行動を自覚のないままにとってしまうんじゃないかな。ここでは、いったい何を教えようとしているの??子どものことを思っている??ここには、子どもの心にとって、大切なものがかけている。

でも、たくさんの子どもの話をきくうちにわからなくなった。路上で暮らしているのと、この施設で暮らしているのと、どちらが幸せなんだろうか。確かに、この環境は悪い。でも、食事を食べることができ、学校に通うことができ、職業訓練をうけることができる。路上で危険な目にあうこともない。

どうすることが彼らにとって一番いいのだろうか?

～職業訓練～

2階では、裁縫と美容・理髪 of 職業訓練をしていた。それぞれ、20人くらいの男の子と女の子がいた。理髪のところ、前髪をきってもらった。志望する子が、この職業訓練を受けているという。ただ、本当の基礎だけで、これだけでは、就職できないというのが現実らしい。

～インタビュー～

好奇心いっぱいの顔がこちらをむく。みんな人なつっこい。やんちゃな子も多い。こういうとき、ドミクさんは本当にすごいと思う。すぐ、子どもと仲よくなってしまう。いつのまにか、子どもに囲まれている。

6人にインタビューした。

ヘアカットの職業訓練を受けている男の子は16才だ。身長は155cmの私と同じくらい。16才よりも年下に見える。8ヶ月前にここに来た。その理由は、あまり言いたがらない。答えがぼやけてかえってくる。彼はストリートで暮らしていた。夜中に歩いていたら、警察に連れてこられたらしい。この職員の何人かもいたという。同じようなたくさん子どもたちと一緒にトラックに乗せられて。

他の子も、同じような答えだった。

「警察に逮捕されたから。」

「橋の上で、ウロウロしていて、捕まったから。」

13才くらいの男の子にも、話をきいた。この子は、元気がよくて、人なつっこい。

やんちゃ坊主って感じがした。目があうと、にっと笑ってくれる。

「いつから、いるの？」

「2、3週間前からです。」

それを聞いて、通訳をしていた綾子さんがえーっと大きな声をあげる。この子のことを、前から知っているようだ。もう1度、聞いてみる。前にも何回もCETCに入ったことがあると教えてくれた。そのたびに、逃げ出しているんだといたずらをした子どもみたいな顔で言った。

「どうして、逃げ出したの？」

「家族に会いたかったから。」

「でも、さっき、橋の下で寝泊まりして、ウロウロしていたって言ったよね。家族には会ったの？今、家族はどうしているの？」

「家族はみんな死んでしまったんだ。」

もう、私には、それ以上何もきけなかった。

15才の女の子にもインタビュー。インタビューに答える彼女はとても大人びて見えた。

「どうして、路上で暮らすことになったの？」

「もっと、自由な生活をしたくて、家を飛び出しました。」

「そのことを後悔したことってある？」

「1度、路上にでたら後悔はしません。」

「生活していくお金はどうしていたの？」

「スリをやっていた友だちの家で生活していました。その友だちは今、逮捕されていたり、職業訓練をうけていたり、今もスリをやっていたりします。」

「今の暮らしと昔の暮らし、どっちがいいですか？」

「どっちがいいとは言えない。路上では友だちがいて、いっぱい楽しい思いもしたし、自由だった。でも、ここでは食事も教育も受けられる。将来、自分たちのような子を助ける仕事に就き、社会のために役に立ちたい。」

6人に同じ質問を試してみた。

「あなたにとって、1番大切なものは何ですか？」

すると、同じような答えがかえってきた。

「家族と一緒に暮らせることです。」

「勉強することです」

今まで、私は、家族がいることや、学校に行けることの意味を考えたことがなかった。あたりまえだと思っていたから。だから、この答えをきいて、はっとした。自分がどれだけ恵まれていたのか知った。

< Yes >

制服をきた18才くらいのお兄さん、お姉さんたちがCETCに来ていた。20人くらいは、いたのではないだろうか。その中のひとりの男の子と英語で話をした。でも、となりの工業専門学校の生徒だという。たしかに、施設のむこうに高い、立派な建物があつた。

私の英語力のなさや相手のなまりで、会話はなかなかすすまない。

彼らを迎えるために、整列したCETCの子どもたちを見つめながら、そのめがねをかけた男の子はたずねた。

「Do you like them?」

私の口が勝手に動いていた。

「Sure. I like them.」

たったひとつ、私が自信をもって言えた英語だった。

本当は、彼らのことをどう思っているのかきいてみたかった。ベトナムで暮らす人々は、ストリートチルドレンのことをどう思っているのだろうか？どのように受け止めているのだろうか？

< 若者の家・女子 >

名前の通り、本当に家のような家だ。2階建ての建物の外観は1軒の家だ。迎えてくれる人の暖かさまでもが本当の家のような家だ。ここで暮らすのは、7人の女子たち。14才から18才の子がいた。CETCの中でも、勉強に対して意欲があつたり、どうしても家にもどることができない事情のある子をここで、KnKがサポートしている。CETCの子どもたちと比べると、ここの子たちはおだやかな表情をしている。落ち着いていている。ほほえみとともに迎えてくれた。みんなのお世話をしているエドゥケーターのお姉さんも優しくそうな人だ。

女の子たちは、ちょっとシャイだ。洋司君が折り紙を準備してきていた。ツルの折

り方を教えてあげるつもりだった。でも、彼女たちはツルの作り方なら知っているという。恥ずかしいことに、私も洋司君もツルしか折れない。みんなは、手際よく折ってゆく。完成したのは、カメラ。ネコ。やっこさん。折り方は本屋で立ち読みして、覚えたのだという。すごい。

私は、バルーンアートをやって見せた。みんなにも、風船を配って、いっしょに遊んだ。一度、見ただけで、すぐ覚えてしまう子もいる。とても器用。

空気がやわらいで、笑い声が部屋に響いた。みんながリラックスしてきたところで、インタビューの時間になった。

将来の夢や趣味の話は、照れながらもみんな答えてくれる。でも、過去のことになると、みんな口を閉ざしてしまう。うつむき、床をにらんでいる。目をそらして、答えたがらない。表情がかたくなる。一気に空気が重たくなった。

昔のことは、一緒に暮らすエドゥケーターの人にも話したがらない子が多いときいた。

とつぜん、訪ねてきた私たちが話してくれというのは、難しいのかもしれない。

それでも、ぽつりぽつりと語り出してくれた。

16才になる は、アートが好きな女の子だ。おばあさんと二人で田舎からでてきて、路上で暮らしていた。今の暮らしと昔の暮らしをくらべると、おばあさんに迷惑をかけなくてすむから、今の生活のほうがいいと話してくれた。

同じく16才の女の子は、親が離婚して、お父さんが新しい奥さんを迎えたので、家を飛び出したと言った。お父さんとは、ときどき会うそうだ。

彼女は、うつむいてこう話した。

「今がとても幸せとは言えないけれど、勉強ができるし、ここのほうがいい。」

18才の女の子のその大きなすんだ目からは、涙がこぼれそうになっていた。

「家がとても貧しく、生活できなくて、北部からでてきました。施設に入って、靴磨きの仕事をして暮らしていました。」

彼女は、私ではなく、遠い過去を見ているようだった。暗く深い闇を見て、おびえているようだった。答える声は、かすれて消えてしまいそうだった。

ひとりひとり、路上で暮らすことになった理由がある。経済的な問題だったり、家庭の問題だったり、様々だ。若者の家に来るまでに、たどってきた人生もそれぞれ違う。「ストリートチルドレン」という言葉でひとくくりにすることは、できない。

みんな、重い過去をせおっている。心に深い傷をおっていると感じた。今日、話し

てくれたことだけが、すべてじゃないだろう。それでも、彼女たちは笑っている。強さを感じる。もう少しで、笑顔の裏にあるものを見過ごすところだった。つらいときにこそ、無理して明るくしてしまう時もあるよね。若者の家が彼女たちの傷を癒し、優しく包み込んでくれる場所であればいいな。

< レストラン >

昼食をとるためにやって来たレストラン。ここは、フランスのNGOが運営している。貧しい子どもや元ストリートチルドレンだった子が調理や接客を学ぶ学校に併設されたレストランだ。2階建てで、一見、日本の学校のような建物。白い料理人が着る服をきて、えんじ色のエプロンをつけた生徒たちが厨房に向かう。でてくる料理は、どれもおしゃれ。

料理を食べている時、2階から女の子が手をふってきた。チュップだ。まさか、ここで会うとは思っていなくて、びっくりした。1度見えなくなったあと。ちょっと照れた顔をして、もう1度顔をのぞかせた。「まりこ」って、聞き取れないほど小さな声で呼んで、また隠れてしまった。名前を覚えてくれていたとは、思わなかった。

施設を見学させてもらうことになった。ここで勉強しているチュップも一緒にまわることになった。2階へとあがる。教室もあり、調理以外の勉強もしていた。

いつのまにか、チュップと私は、2人で腕をくんで列の最後を歩いていた。チュップが自然に手をつないでくる。私もしっかり握り返す。私たちは結局、ひとつも会話をしなかった。ただ、ほほえみあうだけ。でも、たしかに何かが通じ合った瞬間だった。

< フーン >

たくさん子どもたちに会ってきた。その子たちがしてくれたストリートでの話が忘れられない。でも、まだ、わからないことがいっぱいある。実際に、どんな暮らしをしているんだろうか？どんな表情をしているんだろうか？何を考えているんだろうか？知りたい。会いたい。

今日は、グループホームの男の子、フーンの案内で、今路上で暮らしているストリートチルドレンに会いに行く。フーンもストリートでの生活が長かったという。

フーンが昔、暮らしていた公園や街をまわった。歩きながら、たくさんのことを話してくれた。今日は、通訳はなし。フーンの英語はききとれないところもあったけれど、だいたいのことはわかった。

「若者の家に入るまで、長い間、ストリートで暮らしていた。この公園では、2年

間すごした。ここの水道でシャワーをあび、ベンチで眠ったんだ。でも、警察が来たので、いれなくなって、場所を移動した。いろいろなところをてんてんとしていた。

たくさん子どもたちに会った。まりこみたいに小さな男の子のことを覚えているよ。

稼ぐためには、何でもした。法律に反するようなこともやった。

たばこは12さいから吸っているんだ。ストリートで本当にたくさん覚えたよ。」そう言って、苦笑いをした。

フーンの昔からの知り合いという家族に会った。兄妹3人で働きながら、路上で生活しているらしい。そのなかの1番小さな年下の妹、14才のイェンにインタビューをした。彼女は、学校に通っている。タバコを売り、稼ぎは兄弟に渡していると言った。他の家族のことをきいても、正確な答えはかえってこなかった。路上での暮らしの話もあまり、きくことができなかった。

まだ、実際のストリートチルドレンの姿が見えてこない。

<ロットリーチケット>

自分でもインタビューがうまくいかないのがわかっている。このままじゃ、何も見えてこない。表面をなでるだけの言葉じゃ、何も伝えることができない。私は、何をしに来たんだ。仲良くなって、楽しかったねで終わっちゃいけないんだ。何が知りたいんだろう？何を伝えたいんだろう？と自分に問いかける。おなかは痛いし、寒気がする。空はもう真っ暗だ。バイクのライトと公園のオレンジ色の街灯だけがまぶしい。けたたましいクラクションが今日は耳障りにきこえた。夜の公園の縁石に座り込んで、私の気分はずんずんと落ち込んでいった。

そのとき、ロップさんと綾子さんが2人の男の子を連れてきた。ひとりは小さなカバンを肩からさげていた。その手には、しっかりと宝くじが握られていた。

場所を移動して、インタビューをする。

「年齢と名前を教えてください。」

「14さい。 　　です。」

「17さい。 　　です。」

年齢を聞いて、びっくりした。もももっと年下に見えた。体も小さい。日本のこの年代の子とくらべて、ストリートチルドレンの子は、体が小さい。きっと、栄養が足りなかったり、夜に十分な睡眠をとれないからじゃないかな。

もうひとつ、気づいたことがある。 は、最初に会った時は、16歳って言った。悪気があってのことじゃない。グループホームでも、会うたびに年齢が違う子に何人もあった。自分の年齢がわからないのだ。はじめは、不思議だった。だって、日本では、自分の

年をみんな自信をもって答えていたから。でも、よく考えてみた。自分の年齢が分からなくなるほど、小さい頃から彼らは、生きるために毎日を生きていたんだ。だれが、誕生日を祝ってくれるというの。

「宝くじはどれくらい売れるの」

「40000ドン」

宝くじは1枚2000ドン。だから、20枚を売る計算になる。日本円にして、1枚14.6円、1日293円。でも、そのお金は売り上げであって、すべて自分の収入になるわけではない。

「稼いだお金はどうやって使うの」

「食事と自分のために使う」

「オーナーのところで、貯金しています。」

貯金したお金は、本当に返ってくるんだろうか。お金が貯まったら、帰ると言っていた。そんなに親切なオーナーが子どもを12時まで働かせるだろうか。ウソのような気がする。なんの保証もないのに は信じて、疑わない。私のカンがはずれているといいのに。だんだんとベトナムの社会が抱える闇の部分がみえてきた。ストリートチルドレンのうしろで、子どもたちを搾取する大人の姿をかいま見た。ストリートチルドレンの問題は、わたしが考えていたより、もっと複雑だった。真っ黒な深い闇。まだまだ、私には見えない。でも、確かに、問題の根っこがここに存在するんだと感じた。

「いつからやっているの？」

「半年前から」

「8ヶ月くらい前から」

「その前はどうしていたの？どこに住んでいたの？」

「ホーチミンから500キロくらいのところに住んでいて、学校に行っていました。」

「じゃあ、どうして今は宝くじを売ろうと思ったの？」

「家が貧しく、経済的に苦しくなったから。オーナーと知り合いで、車でホーチミンまで来ました。」

「それは自分の意志で決めたの？それとも、だれかに言われて決めたの？」

「家が苦しいのが分かっていたので、自分の意志で決めました。でも、そういうことに慣れているから、つらくありません。」

自分と同じ年頃の男の子は、自分で決めたと言い切った。見た目は幼く見えた。でも、こんなにもたくましい16才が日本にいるだろうか。私が同じ状況になったとき、のように微笑めるだろうか。でも、最後の言葉がひっかかった。慣れているってどういうこと？

「慣れていると言ったけれど、同じようにオーナーに連れてこられる子はいっぱいいるの？」

「村で10人くらい」

「10人中3,4人」

そんなにもたくさん子どもたちが連れてこられているなんて。人身売買に近いじゃないか。家族のことを尋ねてみた。「稲作をしている。」とのこと。ベトナムの田舎ってどんなところなんだろうか。どうして、そんなに貧しいのだろうか。

「どこで寝泊まりしているの？」

「宝くじを卸しているオーナーのところ。」

どうも、2人は別々のオーナーのところにいるらしい。子どもを雇っている宝くじの店は、このホーチミンにどれくらいあるのだろうか。

「食事や洗濯はどうしているの？」

「毎月、お金を払ってオーナーのところでしています。」

「食事は自分でとっています。1日2食のこともあります。」

「つらいときはありますか？」

は「つらくない」と即答した。でも、その顔は笑っていなかった。幸せそうじゃなかった。ちょっと、おびえているような目。どうして、14才の男の子がこんな表情をしなくちゃいけないの。自分でつらいと言ってしまったら、現実が重くのしかかってくる。ありのままを見るのってしんどくて、怖い時もある。家族と離れて、今の生活が、つらくないわけじゃないよね。ごめんね。こんなときいて。

「ときどき、つらい。宝くじがあまり売れない時とかは。偽物の宝くじをつかまされたこともある。客が交換に来た時に偽物とわかったけれど、自分のお金で支払わなければ、いけなかった。」

「これからもずっと、宝くじ売り続けるつもりなの？ どうするつもりなの？」

「あと半年くらいしたら、やめる。建設関係の職業につきたい。」

「2, 3年続ける。お金がたまったら、やめることにしている。」

のお金をオーナーは、ちゃんと返してくれるのかな。 はどうやって、職業を変えるつもりなんだろう。心配。

いつもは、昼の11時から24時くらいまで働いているという。かせぎが多いと早く終わることもあるというけれど。24時は遅すぎる。時間も長すぎる。とてもショックをうけた。

明日の7時に会う約束をした。名刺を渡すと、にっこりと笑ってくれた。写真をいっしょにとってもらった。すると、もう1枚一緒に写りたいと言う。仲良くなれそうな予感がする。こちらを振り返り、笑顔で手を振る。2人は並んで、街の明るい方へと歩いていった。その背中が見えなくなるまで、私は見送り続けた。夜の街が彼らのみこんでしまうような錯覚がした。

来てくれるだろうか。お願い。来て。もう1度、会いたい！今は祈るだけしかできない。どうか、お願いだから。彼らに笑顔を。眠る場所を。幸せを。あたたかい家族を。明るい未来を。もう1度、会いたい。

次の日もその次の日も公園に行ってみたけれど、あの子たちはいなかった。もう1度会うことはできなかった。約束して、会うのは難しいのだという。ストリートで暮らす子は、時間の感覚があまりないし、約束にも慣れていないから。他にも、来られないわけがあったんじゃないかと、いろいろ考えてしまう。

この街のどこかで、今夜も彼らは、宝くじを手には歩いているのだろうか。彼らの未来を踏みじめる大人がいないことを願う。もう1度、会いたかった。力になりたかった。タクシーに乗っても、つい目で彼らの姿を探している自分がいた。

< トウン (卒業した子) の家へ >

若者の家を卒業した男の子、トウンの家を訪ねる。

車が1台、やっと通れるような細い路地に入っていく。タクシーでは、それ以上進むことができずに、歩くことになった。何度も往復してもなかなか、家が見つからない。

あたりはもう、すっかり暗くなった。街灯もほとんどない。舗装されていない道は、ごつごつして歩きにくい。まわりに観光客はいない。夜でも、たくさんの人が道にベンチをだして、おしゃべりしている。みんなが物珍しそうに見ている。ちょっと、怖いと思った。

家がたくさん並んでいた。貧しい感じの家が多かった。小さい家の中にテレビだけ

があるところもあった。観光用ではない、本物のベトナムの暮らしを見ることができた。建物の裏には、川が流れていた。そこには、暗くてよく見えなかったが、ゴミがたくさん浮いているようだった。いやな臭いもした。衛生的には、あまりよくない場所のようだった。

足もそろそろくたびれてきた頃、バイクをひいてくる背の高い、お兄さんが見えた。やっと会えた。あまり遅いので、むかえに来てくれたらしい。みんなで、タウンの家に向かう。

タウンは21さいくらい。若者の家を卒業し、バイクの修理の仕事をしている。お母さんと姉妹2人と小さな弟と暮らしていた。お父さんはいないみたい。ドミンクさんたちと会えて、本当にうれしそうだった。

タウンは、片目がどんどん悪くなっているという。若者の家にいたときから、ずっと治療を受けていたそう。彼の意志があれば、支援するできるということだった。KnKが若者の家を離れた子ともコンタクトをとり、気にかけていることがわかった。

< 家族 >

タウンの家族といっしょに夕食に行くことになった。レストランでは、彼の妹と話ができた。彼女は同い年の16才。ガイドブックでベトナム語を指さしながら、おたがいに自己紹介をした。でも、本は必要なかった。言葉は必要なかった。彼女はベトナム語をしゃべり、私は日本語で返事をした。それでも、通じ合えた。笑顔ひとつで十分だった。

彼女は、とても親切にしてくれた。エビのむき方を教えてくれ、ご飯をよそってくれ、魚を食べやすくしてくれた。よく気がつき、細かい気配りをしてくれた。どうして、こんなに人に優しくなれるんだろう？

彼女がすすめてくれたフルーツ。もう、お腹はいっぱいだし、カットフルーツはお腹をこわすからダメだと言われていたけど、私には断れない。彼女のがっかりした顔を見るよりは、お腹をこわすほうがずっとマシに思えた。

お母さんもとてもしっかりとした人だった。ご飯をわけ、片づけまでてきぱきとこなす。本当に、すてきな家族。みんな、人のことを思いやる心を知っている。

この家族が離ればなれにならなくてはいけなかったなんて。子どもたちが路上で稼がなければいけなかったなんて。

ドミンクさんとタウンは、並んで座って、本当の親子のようだった。帰る時、2人は肩をしっかりと組んで歩いた。その後ろ姿がなんだか、とてもせつなくて、鼻の奥がツーンとした。私は、KnKの今までの活動をよく知らない。どこで出会い、どんな会

話をかわし、今にいたるのかを私は知らない。でも、2人の背中を見ていたら、ドミクさんがタウンにとって、本当にいい父親なのがあった。人種も血筋も言葉も国境も関係ないんだ。もし、私が英語かフランス語をしゃべれたならば、ドミクさんに言いたい。

「あなたには、とつてもすてきな息子たちや娘たちがいる。」

この家族を見ていると、KnKの活動にはとても大きな意味があるんだと実感する。

<ストリートチルドレン>

フーンの案内でストリートチルドレンに会いに行く。中国系の店が建ち並びチョロン。

タクシーの中からも、広場や公園のベンチで寝ている子どもが見える。みんな、夜活動して、昼間は寝ているらしい。身なりがこぎれいなのは、警察に捕まらないようにするためだろうと、フーンが教えてくれた。

たくさんの人と物であふれかえるマーケットへやってきた。たくさんの露店がひしめきあう。営業用スマイルはなし。

ここでも、たくさん働く子どもがいた。時間はお昼近く。学校には、行っていないのかもしれない。大きな袋をひきずって、ゴミを集めて働いている子もいた。市場で、荷物の積み下ろしをしていた男の子は、まだ10才くらいに見えた。ガラスやレンガの破片がちらばる工事現場を裸足で歩いていた。いっぽうで、昼間からカードで賭博をしている大人も見かけた。

<チョロン>

市場の人ごみをぬけたところに、遊具のある広場があった。そこのベンチで、寝ている男の子を見つけた。フーンと洋司君と3人で、話しかけにゆく。そばにしゃがんで、顔をのぞきこむ。14才くらいに見えた。服はよごれ、ところどころ破れている。フーンがいくら声をかけても、頬をたたいてみても起きる気配はない。死んでいるのかと、人が集まってきたが、顔に止まったハエをはらう仕草をしたので、眠っているだけだとわかった。

きっと、夜活動して、麻薬か何かをして、深い眠りに入ったのだろうとのこと。

前は、このあたりにはもっとストリートチルドレンがいたそうだった。ストリートチルドレンが麻薬に使った注射針が道路いっばいに落ちていて、危険なほどだった。注射針をまわし打ちするので、エイズも問題になったそうだった。今は、警察に捕まるので少なくなったという。

麻薬を使っている = 犯罪、危険というイメージがあった。でも、たくさんのストリートチルドレンにあってきて、それが偏見だったと気づいた。彼らには、麻薬やエイズについての正しい知識を得る機会がない。麻薬の危険性をだれが教えてくれたらどうか。麻薬を使って、逃れたいほどの現実。孤独。不安。家族の愛情につつまれて、幸せに暮らしている子どもは麻薬には手をださない。そして、子どもに麻薬を売っている大人がいるってこと。警察は、子どもを捕まえる前に、子どもを食べ物にしている大人たちをつかまえているのだろうか？？

<カンボジアから>

通りの向こうに、座り込んでいる男の子を見つけた。カンボジア人じゃないかとのこと。なんで、カンボジアの子どもがベトナムにいるんだろう？私には、さっぱりわからなかった。

その男の子にクメール語が話せる綾子さんが話しかける。やっぱり、カンボジアの国境の街、スバイリエンからやって来たのだという。お母さんは故郷にいるという。3日前から、お金を稼ぐために、物乞いをしている。10才。肩から、小さなカバンをさげている。地面におかれた赤いプラスチックの容器には、残飯のようなものが入っていた。カメラやたくさんの人に囲まれて、おびえた表情をしている。どうやってきたのか？どうやって帰るのか？と質問しても、「自分で車を運転する」と答える。ミネラルウォーターを差しだしても、いらないと首を横に振る。落ち着かない様子だ。

その子は赤ちゃんを抱いていた。赤ちゃんはパンツをはいていない。私は、てっきり兄弟だと思っていた。でも、兄弟じゃないという。あとから、聞いた話では、赤ちゃんは道具として連れてこられたのだという。よりかわいそうに見せるために。私は、ショックをうけ、考え込んでしまった。ベトナムだけじゃないんだ。カンボジアのことはぜんぜん知らない。「どうして？どうして？」と言葉にならない思いが全身を駆けめぐっていた。ちゃんと生きていけるか、心配。

あの男の子の吸い込まれそうな目が忘れられない。彼の目に私はうつらない。

< >

通りのレストランで、昼食とっていた。3人の男の子たちが近づいてきた。ひとりはずボンをはいていない。服もずいぶん、汚れている。みんな裸足だ。肩からは、小さなかばんをさげている。手に持ったプラスチック製の片手なべのような形の容器をさしだす。物乞いをしているようだ。昨日、ストリートで会ったカンボジアの子といっしょだ。

クメール語のできる綾子さんがたずねると、3人はそれぞれ、「13さい」「14才」「15才」と答えた。やっぱり、国境の街、スパイリエンから来たのだという。

宿泊していたホテルのあたりは、観光客が多い。そのせいかもしれないが、物乞いをしている子どもや赤ちゃんをだいた女性を何人も見かけた。みんなカンボジア人のようだった。

< CETCでインタビュー >

もう1度、CETCを訪ねた。少しは、顔を覚えてくれたのかもしれない。むこうから、Hi!と笑いかけてくれる。

カメラをまわすと、さらにたくさん子どもたちが集まってきた。みんな、興味津々だ。その場にいた子みんなにきいてみる。

「宝くじを売っていたことのある人はいる？」

10人くらい手があがった。その多さにびっくりした。その中から、4人が立候補してインタビューをうけてくれた。

「どうして、宝くじを売りはじめたの？」

みんなの答えは同じだった。

「家が貧しいからです。」

「宝くじを売ろうと決めたのは、自分の意志？それともだれかに言われてですか？」

「おじさんが教えてくれたから」

「お母さんに言われた」

「お父さんに言われたから」

「おばあさんに言われました。」

女の子にもきいてみた。

「お母さんです。妹や弟を助けて、学校に行かせるためです。」

この子に「では、あなたは学校に行っていたの？」ときくと、

「行っていませんでした。」と顔を曇らせた。

「どうして、CETCにくることになったの？」

「警察に捕まったからです。」

この前のインタビューの時も、警察に逮捕されたからと答えた子が何人もいた。どういふことなんだろう??もうちょっと、つっこんできいてみる。

「夜中に宝くじを売っていました。警察の人にIDカードを持っているかときかれて、持っていないと答えるとここに連れてこられました。」

IDカードってなんだろう？他の子にもIDカードのことをきいてみた。
「捕まった時、IDカードは持っていなかったし、IDカードのことはきかれませんでした。」

次の男の子たちにも同じ質問をする。

「公園で眠っていて、気がついたら、トラックに乗せられてここにいました。」

「夜中にウロウロしていたら、声をかけられました。故郷に帰してくれると言われて、トラックに乗って、着いたらここでした。」

「夜中にウロウロしていたら、連れてこられました。」と答える子も何人かいた。この前のインタビューのときもそうだった。ウロウロしているだけで、捕まるものなんだろうか？「どうして、夜中にウロウロしていたの？」

2人の男の子が答えてくれた。

「すりにあって、稼いだお金を盗られてしまったことがあった。それで、家に帰るのが怖くなったからです。」

「宝くじがぜんぜん売れなかったからです。それで、家に帰ってお父さんに殴られるのが怖かったからです。」

この子に、お父さんはよく殴ったりするの？ときいても首をふるだけだった。この子たちへの最後の質問。

「あなたにとって、1番大切なものは何ですか？」

「家族です。」

今日のインタビューで、少しだけけれど、子どもがストリートで暮らしたり、働いたりする背景が見えてきた。

<スキルクラブ>

C T E Cのなかには、いくつかクラブがある。学校でいう、部活のようなものだ。そのうち、音楽とサーカスのクラブをKnKがお金の面でサポートしている。「塀の外にできることもできず、楽しみも少ないこの子どもたちの心に潤いを」というのが目的。

週3回、練習しているらしい。サーカスの見学をする。15人くらいの子どもたちがいる。一輪車に乗ったり、たくさんのフラフープをまわしたり、わっかでお手玉のようなことをしている子もいる。みんなすぐに近寄ってきて、人なつっこい。

指導をしているのは、キムさん。明るく、きれいな人だ。ホーチミンを中心に活動するプロのサーカス団の一員だという。彼女もかつて、このCTECで暮らしていた。今は、結婚して、子どももいる。家族の話をするときのキムさんは、とても幸せそうだった。

隣の教室でやっていたのは、音楽のクラブ。女の子と男の子があわせて、20人くらいいた。カラオケの機械と先生を前に、元気のいい声で歌っていた。あまり、上手とは言えない。でも、子どもたちのストレス発散になるのであれば、いい。でも、あまり大きな声なので、長い時間歌って疲れないのかと気になった。ドアの近くに座っている男の子のなかには、あまり声を出していない子もいた。楽しそうでない子もいて、気になった。

<夜の街の子どもたち>

夜の9時。ホーチミンの街は、明るく、にぎやかだ。ひとどおりも多く、昼間より活気づいている気さえする。10分ほど、街を歩いているだけでも、たくさんの子どもたちを見かけた。靴磨きの少年。ガム売りの女の子。シガーレット売り。花売りをしている女の子や男の子。宝くじ売り。どれも、小銭ていどしか稼ぐことができない。それでも、彼らは夜の街を歩き続ける。買ってくれそうな人に目星をつけて、声をかける。なかには、びっくりするくらい小さな子もいる。制服を着ている子もいる。日本でなら小学2年生くらいの子が営業スマイルをする。ずっと、一緒についてきて、買うまで粘り続ける子もいる。だだをこねるように、1個1ドルのガムを突きつける子もいる。たくましい。このエネルギーを別のところに向けることができれば、この国は豊かになるはず。

気になったのは、花売りの子がみんな同じかごをさげて、同じバラの花を売っていたこと。卸しているところ、元締めがあるってこと??ここにも、働く子どもたちのうしろにいる大人の姿がかすんで見えた。

今夜も、あの子たちは、ネオンの下を歩き続けているのだろうか。

<若者の家・男子>

KnKの運営する施設、<若者の家・男子>を訪問した。ここでは、16才から18才くらいの男子が生活している。ここから、学校に通ったり、職業訓練をうけに行くそうだ。はじめに、迎えてくれたのは、子どもたちの世話役であるエドゥケーター

のザックさん。優しそうな人だ。深く刻まれたしわがザックさんの人生や人柄を語っている。

ハウスの中を2人の男の子が案内してくれた。ハウスの入り口には、紙がはってある。何か、手書きで文章がびっしりと書いてあった。これは、ここの男子たちが自分たちで決めた若者の家のルールなのだという。

1階には、台所と大きなテーブルがある。お母さんくらいの年齢の女性がてきぱきと動いている。ここのハウスキーパーさんだ。料理や家事の指導をしているそうだ。

2階が、生活スペースだ。1部屋に4人の男子がいる。2段ベッドが2つと鍵のかけられる個人のロッカーがある。壁には、芸能人のポスターや日本のマンガのシールがはってあった。同じ年代なんだなってあらためて思う。ちがうのは、部屋がとても片づいているところ。私の部屋とは、くらべものにならないほどキレイだ。そう言うと、

「僕らは4人で掃除するけれど、君はひとりだからだよ。」
となくさめられた。うーん、そうなのかな。

掃除や食事の準備は、当番制らしい。1日の日課に掃除をする時間があるという。バルコニーのようなところには、洗濯物が干してあった。これも自分でするのだという。日本の高校生よりも、ずっとしっかりしている。

学校や職業訓練に行っていた男子たちも帰ってきて、ハウスはいちだんとにぎやかになってきた。ハウスキーパーさんの作ってくれた昼食を一緒に食べた。揚げ春巻きにフォー。炒め物やチャー。どれも本当においしかった。やっぱり、男子たちはよく食べる。

それでも、自分のことだけでなくまわりも見ている。私が食べ終わったところを見て、次の料理をのせてくれたりした。水やふきんをすすめてくれたり、何かと世話をやいてくれた。

食事の後に4人の男子にインタビュー。みんな、ストリートにいるときにここのエデュケーターの人に出会ったのだと言った。そのなかで、昔、「サイゴン駅センター」という施設にいたという子がいた。そこにいたときは、自分で学費を稼がなくてはいけなくて、大変だったと話していた。そんな施設があるなんて知らなかった。いつも、インタビューするたびに、次々と知らない話がでてくる。

逆インタビューもうけた。今まで、質問するほうだったので、こんなに緊張するとは思わなかった。

「ベトナムと日本の違いは何ですか。」

「えーと。えーと。何だろう。ちょっと待ってね。バイクが多い！ことかな。」

男子のひとりが歌を歌ってくれた。歌詞の意味は分からないけれど、リズムカルで楽しい歌。みんなで手拍子をする。歌い終わった後に、お返しに何か歌ってほしいという。どうしよう。人前で歌うのって恥ずかしい。でも、何か歌わなきゃいけない雰囲気。中学校で習った「歌よ ありがとう」という合唱曲を歌った。でも、不思議と恥ずかしくなかった。それどころか、ちょっと楽しかった。日本にいたときとでは、自分の中でも何かが変化しているのかもしれない。

< 職業訓練 >

若者の家をおとにして、男子たちの職業訓練先を訪問する。バイク修理のところでは、3人の男子に会った。忙しそうに、手を動かしている。

次に行ったのは、理髪店だ。さっき、若者の家で案内をしてくれた2人をあわせて、3人の男子がいた。仕事の様子を見学する。ここのオーナーは25才。彼も元ストリートチルドレンだという。CETCの職業訓練をうけていた。でも、それだけでは技術は十分でなく、いろいろな理髪店に勤めて、勉強した。少しずつ、お金をためて開いたのが今の店だという。

ここで働く3人とオーナーにインタビューをした。

「あなたにとって、家族って何ですか？」

オーナーは、ちょっと照れながら言った。

「最近、結婚して、子どもがうまれました。家族って何なのか、まだよくわかりません。」

でも、そう答えたオーナーは幸せそうだった。

「僕にとっては、父、母、兄弟のことです。家族というのは、鳥の巣のようなものだと思います。」

彼は、迷うことなくこう答えた。今、彼はずっと家族と連絡をとってないとも言った。私には、どうして？とは、きけなかった。

「父、母、兄弟のことです。でも、若者の家の兄弟（仲間のこと）やエドゥケーターのことでも家族と呼べると思います。」

家族って何だろう？今日、インタビューしたとき、みんながすらすらと答えるのに驚いた。私は、今まで「家族」について、考えたこともなかった。それは、たぶん、家族の存在があまりにも、あたりまえだったから。

私にとって、家族というのは、空気のようなものだと思う。ふだんは意識しないが、なくてはならないもの。どんなに離れていても、安心感をあたえてくれるものだと思う。

あなたにとって、家族って何ですか？

< ロップ >

今日は、お昼からずっと、ロップがいっしょだった。ロップは、空港にむかえに来てくれていたグループホームの男の子の1人だ。

英語はあまりわからないらしい。昼食のときも、ずっと落ち着かない様子だった。

ロップが昔、暮らしていたというタオダンパークへやって来た。彼は、ここで宝くじを売っていたのだという。背の高い木がたくさんあり、木陰をつくっている。この公園の中は涼しい。広々としている。

ベンチに座り、インタビューした。

「年はいくつですか？」

「18才。」

この前、会った時は17才と言っていた。やっぱり、自分でもはっきりと年齢がわからないのだ。

「どれくらいの期間、宝くじを売っていたの？」

「自分でもわからないほど、本当に小さいころから、宝くじを売っていました。」

「家族はどうしているんですか？」

「小さいころに、おじさんとホーチミンにでてきました。いつの間にか、はぐれてひとりになっていました。それで、宝くじを売り続けました。父と姉は、地方にいます。ベトナムの旧正月に会いに行きます。」

「お母さんは、どうしたのですか？」

「父の話では、母は牛やいろいろなものを売ってしまい、家をでていったそうです。各地を転々としているそうです。」

「今、宝くじを売っている子どもたちが、このまま教育の機会を得られずに大人になったら、どんな職業に就くと思う？」

「将来、肉体労働にしかつくことができないと思う。」

「ロップは、自分自身は教育を受けて、変わったと思う？」

「若者の家に入って、教育を受ける機会があった。もっと、高度な教育をうけて、同じような境遇の子どもたちのために何かをする。まだ、何ができるのは、わからないけれど。ストリートで子どもたちに声をかけたり、エドューケーターのようなことをしたい。」

インタビューの後で、彼は公園のベンチを指さし、そこで眠っていたとジェスチャーで教えてくれた。1度、寝転がってみたけれど、ゴツゴツして痛かった。そこから見上げると、木々がお化けのように見えた。通行人が大きく、恐ろしく見えた。暗い夜なら、なおさら孤独だろう。このベンチで、彼はどんな夢を見ていたのだろうか？

難しい質問にも、言葉を選ぶようにしてちゃんと答えてくれた。今度は、逆に質問された。

「どうして、そんなにベトナム人の生活を知りたいの？」

この人、するどい！ たぶんこれは、今まで私たちがインタビューしてきた人、みんなが思っていたことだろう。「どうして、とつぜんやってきて、質問を雨のように降らしていくんだ！？」とみんな思っていたことだろう。

どうして、私が日本から来て、家族のことや昔のこと、みんなが1番言いたくないだろうと思われることをきいているのはね、知らないと始まらないから。

私は、ずっと、学校に行けなかったり、難しい状況にある子どものために何かしたいと思っていたんだ。何ができるか、知りたくてベトナムに来たんだ。

私は、日本の子どもたちに、ベトナムの子どもたちの現状を伝えたいと思っているんだ。そして、いっしょに何ができるか考えていきたい。そうすることで、日本の子どもたちも共に成長していけると思うから。

今日は一日、ロップもいっしょに行動した。ロップは今、学校にも行っていないし、就職もしていないと言っていた。ドミンクさんは、彼に何か伝えたいことがあったのかもしれない。孤児院にも行ったし、ストリートチルドレンの子に会ったときも、インタビューのときも間近にいた。彼はKnKの活動をどうおもったんだろうか？何を感じたのだろうか？

<ミャオとマップ>

メインストリートから1本入った通りにあるレストランで、遅い夕食をとっていた。

9時をすぎても、人通りはたえない。ベトナムのレストランはオープンカフェタイプが多い。そのため、通り側の席に座ると、物を売りに来る人や花売りの子どもたちに声をかけられる。

今夜、出会ったのは、2人の男の子だった。プラスチックの容器を差し出す。物乞

いをして歩いているようだ。

綾子さんがクメール語で話しかけた。小さいほうの子がマップ。ちょっと大きいほうの子がミャオ。2人は、兄弟だと言った。それぞれ、10才と12才らしい。カンボジアのスパイリエンから来た。お母さんは、故郷にいると言う。どうやって来たの？ どうやって帰るの？ とたずねても、

「2人で車で来た。自分で運転して帰る。」

と答える。よくわからない。

2人に一緒に夕食を食べないかと誘う。一緒に席につくと、マップはにこっと笑った。鶏肉の入ったフォーとベトナムティーを注文する。夢中になって、食べている。おいしそうに食べる。

時計は10時近くを指している。この子たちは、これからどうするのだろうか？

食べ終わり、立ち去ろうとする2人を綾子さんとカメラマンの常田さんが追跡することになった。本当は、私も行きたかった。

私は、闇に消えてゆく2人の背中を見つめていた。

<カンボジアのfamily>

綾子さんと常田さんは、その夜、マップとミャオといっしょに川べりまで行ったそう。そこには、4家族ほどがいたという。

次の日の夕方、私もその川べりに行くことができた。その河原は、建設現場のように柵で囲まれていた。網の隙間を通過して、中に入る。こぶしより大きな石がごろごろしている。そこらじゅうにガラスの破片が散らばっている。そこをカンボジア人の子どもたちは、裸足で歩いていた。

ビニールシートと段ボールをひき、石で囲んだ場所があった。そこには、3人の女性と3人の赤ちゃんがいた。ミャオとマップもいる。マップくらいの子どもが5人くらいいた。

狭いスペースにぎゅうぎゅうづめで座っている。少し離れて、大きな男の子と成人した男の人がしゃがんでいた。

お母さんのひとりにたずねると、「3日前に、船と車を使い継いで、カンボジアから来た。」という。その人は、「この子とこの子が私の子どもだ」と、マップとその横にいた男の子と腕に抱いた赤ちゃんを指さした。

じゃあ、ミャオとマップは兄弟じゃないってこと？ お母さんは故郷にいると言っていたのも本当じゃないってこと？

私は混乱した。家族は？ お母さんはだれ？ いつ来たの？ いつ帰るの？ どうやって？ と聞いても、言うことがみんな違うのだ。何が本当なのかわからない。この女性たちが子どもたちの本当のお母さんかどうかも怪しい。もしかしたら、お金を稼がせるた

めに連れてきている人だっていうこともあり得る。

河原に来ていたベトナム人の話では、この家族は3年くらい前からいると言う。警察に捕まって、強制送還されては、しばらくして戻ってくることを繰り返していると言った。

もう、何が真実なのかわからない。ただ、ひとつ言えるのは、彼らは確かに私の目の前にいたってこと。その声を聞き、向かい合ったってことだ。赤ちゃんが病気なのだと言っていた。下痢をしているらしい。髪の色が白っぽく、やせていた。

どうして、カンボジアは貧しいのだろう？

どうして、子どもたちが物乞いをしなければいけないんだろう？

ねえ、どうして？ねえ、どうして？

< 貧しいってなんだ?? >

C T E Cで何度もきいた言葉。「Because my family is poor.」

家が経済的に苦しいから、貧しいからという理由をたくさんの子どもの口からきいた。カンボジアからきたお母さんらしき女の人も、同じことをいった。

日本は豊かでしょう？物質的には。だから、分からない。子どもが夜中の12時まで働かなければいけない貧しさって何？どうして貧しいの？私が世間知らずなだけかもしれない。でも、日本の大半の子どもには貧しさって実感がわかないと思う。

「貧しいから。」

ときけば、頭では理解できる。そして、わかった気になって、考えるのをやめてしまう。それ以上、想像しようとするのを忘れてしまう。貧しいという言葉を理解できても、感じるができない。

家庭の様子はどんな感じなんだろう？どんな家に住み、何を食べ、何を感じているのだろう？ありのままの生活の姿が見えてこない。知れば知るほど、わからないことが増えていく。いつか、ストリートチルドレンが都会にでてくる前にすんでいた場所を訪れたい。そこに彼らを救うヒントがあるような気がするから。

< ビーチ >

今日は、C E T Cの音楽とサーカスの子どもたちと一緒にビーチへ行く。自由に施設の外にでられない子どもたちの楽しみになれば、と計画された。

45人のりのバスを貸し切った。C E T Cの先生やスタッフの大人たちの数もけっこう、多い。ビーチまで2時間ほどバスにゆられた。

ビーチに到着する。子どもたちは整列させられ、先生が拡声器でしゃべっている。

私たちの紹介はない。お客さんといったかんじだ。

海に入る。水のかけあいっこをする。たくさん子どもたちがちょっかいをかけたやってくる。みんなの笑顔。海草の首飾りを作ってくれる子もいた。英語で一生懸命、話しかけてくれる子もいた。すんなりと、輪のなかに受け容れてくれた。いっしょになって、遊んだ。このときは、みんなともっと仲よくなれる感じがしていた。

今までも、たくさん子どもたちに会ってきて、いつも、ちょっと仲良くなったところでお別れをしてきたから。もう少し、いっしょにいられる時間があれば、もっと仲良くなれるのって思うことが何回もあった。だから、今日はみんなともっと仲よくなれるにちがいないと期待していた。

休憩していると、ドミクさんがひとりで泳いでいるのが見えた。それが、すごくひっかかっていた。ドミクさんのまわりには、いつも子どもたちがいたから。

休憩をはさんだあとぐらいから、ちょっとヘンな感じがした。とりたてて何と言うことはない。やっぱり、遊ぼうとやってくる子もいる。でも、子どもたちとの間に距離感を感じた。うち解けきれない何かがあった。

この前、施設に行ったときには、むこうから寄ってきて、笑いかけてくれた子がもう、近づいてきてくれない。弱々しくしか、笑ってくれない。目があわない。

私は混乱していた。どうしたんだろう？私が何かしたのかな？と思っていた。こんな短時間のあいだになにがあったんだろうと思った。寂しかった。心がスースーした。しょっぱいのは、海だけじゃなかった。

その女の子は、私の知らない子だった。音楽のクラスかサーカスのクラスかも分からない。今までに、関わりを持ったことのない子だった。

私の腕をひいて、写真屋さんのところへゆく。そして、いっしょに写真に写った。

その後で、

「7000ドン、7000ドン」

と私に向かって繰り返した。どうやら、お金を払うように言っているんだとわかった。その写真を自分のために買い取って欲しいらしかった。そばにいた女の子が止めに入ってくれた。

「I have no money.」

と言うと、はあっとため息をついて、どこかに行ってしまった。

びっくりした。そして、悲しかった。私はこの子たちにとって、何なんだよって思った。日本人だから、お金を持っていると思っていたのだろうか。たしかに、7000ドンなら払える。でも、私はそんなことをしに来たんじゃない。同じ高さから向かい合いたかった。ただ、いっしょに遊んでいたかっただけなのに。友だちになりたか

っただけなのに。

急にナーバスになって、落ち込んだ。今日まで、ベトナムで会ってきた子どもたちもみんな、そんなふうに思っていたんだろうかと思ってしまった。仲よくなれたと思っているのは、自分だけなんだろうかと。ベトナムに来て、はじめて、言葉がわからないことを

怖いと思った。ビーチに戻って、水をかけあう元気はもう、なかった。

心が筋肉痛だった。はじめて子どもたちの間に感じた距離感。うち解けきれなかったこと。そして、写真のこと。バスの中で涙がぼろぼろ、こぼれた。ただ、悲しかった。帽子を深くかぶって、いすに体を沈め込んだ。

いつの間にか、眠ってしまっていた。バスもトイレ休憩で、停車していた。ずいぶん、気分もマシになっていた。みんながみんな、そうじゃないと思えるようになっていた。

みんないったん、降りていて、バスには数人しか残っていない。ひとりの女の子が、ビーチの写真屋から買った写真をほほえみながら、ずっとながめていた。それを見て、すべて、もうよくなった。彼女たちが、私のことをどう思っているかなんてわからない。どう思われていても、それでも、いいと思った。施設に戻ったとき、写真を見て、今日の楽しかった思い出をふりかえり、幸せを味わえるなら。それで、悪くないと思った。

<ごみを拾う子どもたち>

ビーチに座っていると、何人もの子どもたちが大きな袋をひきずっているのを見た。いったい、何をしているのだろうか??

男の子に声をかけて、中身を見せてと頼んだ。中に入っていたのは、プラスチックの破片と空き缶だった。それを集めて、お金にするらしい。こんなビーチにも、働いている子どもがいるんだ。

私は、今では、街を歩いていても、タクシーに乗っていても、ビーチに来てもこういう子どもたちのことが気になってしまう。

<ドンコイ>

日本人の観光客がいっぱい。かわいい雑貨を目の前に、はしゃぐ女の子たち。ブランドものの店から大きな袋をさげてでてくる日本人。こんなにも日本人がベトナムに来ていたのか。彼女たちは、カンボジアから物乞いにやってきた子どもにあって、何を思ったんだろう。花売りの子をみて、何を感じたんだろう。

こうして見ると、ベトナムやカンボジア、発展途上国が貧しいのは、日本などの先進国にも原因があるのかなと考えてしまう。だって、おかしいよ。へんだよ。1ドルのガムを売るために一晩中歩き回らなきゃいけない子どもがいる国で、1個1000ドルのかばんを売っているなんてさ。

<コドモ>

この9日間、私はたくさんの人に出会った。子どもたちの置かれている状況を見ることができた。話をきくことも、心と心が触れあうこともできた。と、同時に大人の社会への憤りも強く感じた。

このレポートの中でも、「子ども」「大人」という言葉をたくさん使ってきた。

では、今の私は子どもなんだろうか。大人なんだろうか。たぶん、どちらでもない。

子どもでもなく、大人にもなりきれない今だから、見えるものがある。きこえる声がある。

<おわりに> <はじめに>

ベトナムに来てから、ときどき思った。なんで、来ちゃったんだろう。なんで知ろうとしてしまったんだろう。

私は今まで、新しいことを知るといのは、素敵なことだと信じていた。でも、あんまりにも重い現実を目の当たりにした。

もし、ベトナムに来なかったら、何にも考えず、ベルトコンベヤーに乗り続けていたんだろうな。友だちとバカのことをやって、笑ったり、ケンカしたり、部活をがんばってみたり、クレープ食べたり、プリクラとったりして、平凡に高校生活を終えたんだろうな。

でも、もう知らんぷりなんてできないよ。遠い国のだれかの声じゃなくなったから。目をそらさない。耳をふさがない。

どうしたら、子どもたちを救えるのか??世界を変える方法を知りたかった。私はその答えを探しにやって来た。私は、ベトナムに来れば、答えが見つかると思っていた。てっきり、ドミクさんや珠理さんや綾子さんが答えを知っていて、私たちに教えてくれるのだと思っていた。

でも、たくさん子どもたちに会えば会うほど、分からないことばかり増えてゆく。知れば知るほど、「どうして?どうして?」って気持ちが増える一方だ。私はこの9日間、ずっと迷い、悩み、考えながら過ごした。

問題の根っこは、深く複雑にからみあっている。家庭の問題。虐待。政府の方針。教育。貧困。経済。産業。社会のひずみ。そのしわよせが弱い立場にある子どもたち

のところきている。表面だけの支援では、救いきれない。

ときどき、無力感を感じたりもする。私がいくら、あがいたって世界を変えることなんてできないんじゃないかって思うときもある。

それでも、私はやろう。ひとりで無理ならみんなでやろう。

今の私に何ができるのかは、やっぱりまだわからない。まず、やれるのはひとりでも多くの人に私の見てきたこと、感じたことを伝えることじゃないだろうか。今生きている世界がすべてじゃないと伝えたい。そして、いっしょに考えていくことだ。行動していくことだ。

これは、9日間の旅のエピローグ。でも、私にとっては、はじまりのプロローグだ。

2005年 春休み友情のレポーター 鈴木 まり子